

ギャンブル障害傾向が不確実性下における意思決定に及ぼす影響

—確実性効果と損失回避に着目して—

1721245 眞崎一成

Key words: ギャンブル障害, 損失回避性, 確実性効果

目的

近年、日本ではカジノを中心とした統合型リゾート施設 (Integrated Resort ; IR) の設置が計画されており、外国人観光客からの収益によって日本の経済を活性化させる好機として大きな期待がよせられている。一方で、ギャンブル障害患者の増加が問題として挙げられており、日本人はギャンブル障害になりやすいと示されている (松下, 2018)。また、ギャンブル障害傾向が高い人は、情緒不安定性が高く、調和性と誠実性が低い (高田・湯川, 2020) と研究結果が報告されているが、ギャンブル障害の研究についてはまだ十分ではない。そこで本研究では、ギャンブル障害傾向が不確実性下における意思決定に及ぼす影響について、研究を進めていく。プロスペクト理論の性質である損失回避性と確実性効果を用い、場面想定法実験にてギャンブル障害傾向の違いで意思決定に差があるかを検討した。

方法

手続き 調査参加者は大分大学の学生 158 名 (男性 80 名, 女性 77 名, 不明 1 名)、平均年齢 19.85 歳 ($SD=0.83$)であった。オンライン講義中に Google フォームを Moodle に設置し、回答を得た。

質問紙の構成 調査参加者は、性別、年齢を記述した後に、シナリオ、個人特性に関する質問票に回答を行った。シナリオは、確実性効果と損失回避性の要素を含めたシナリオ文を 2 種類 (A/B) 提示し、調査参加者に「に入る数字がいくらであれば B の選択肢を選びますか」と質問し、「a.10 万未満 b.10 ~15 万未満 c.15~20 万未満 d.20 万 e.21~25 万未満 f.25~30 万未満 g.30 万以上 h.いくらであっても A を選ぶ」の選択肢を選ぶように回答を求めた。なお、シナリオは、投資とくじの 2 種類 (損失有り/無し) 用意した。

結果

まず、シナリオ場面における確実性効果について検討するために一様性の検定を行った (Table1)。選択肢の「30 万以上」「いくらであっても A を選ぶ」の

観察頻度が多くみられた (投資 $\chi^2(6)=241.80, p<.01$; くじ $\chi^2(6)=164.71, p<.01$)。次に、シナリオ場面における損失回避性について検討するために、投資とくじのシナリオの確実性得点に対し、対応のある t 検定を行ったところ、有意な差が認められなかった ($t(157)=0.291, n.s.$)。最後に、確実性効果と損失回避性がギャンブル障害傾向と関連を示すか検討するためにギャンブル障害傾向を説明変数、くじと投資の両シナリオを目的変数とした重回帰分析を行ったが、両シナリオとも有意な説明率が認められなかった。

Table 1 シナリオ場面における一様性の検定

出現値	投資	確率(%)	くじ	確率(%)
10~15 万未満	5	3.16	2	1.27
15~20 万未満	3	1.90	5	3.16
20 万	22	13.92	24	15.19
21 万~25 万未満	1	0.63	0	0.00
25~30 万未満	4	2.53	4	2.53
30 万以上	40	25.32	49	31.01
A を選ぶ	83	52.53	74	46.84
合計	158	100	158	100

考察

本研究では、ギャンブル障害傾向が不確実性下における意思決定に及ぼす影響について検討することを目的とした。場面想定法実験の結果、確実性効果は顕著に表れたが、損失回避性は認められなかった。しかし、予測したパターンを示しており、シナリオ場面を想起させやすいシチュエーションにすることでより顕著な結果が認められたのかもしれない。また、ギャンブル障害傾向が確実性効果と損失回避性に及ぼす影響は、有意な説明率が認められず、本研究での対象者が大学生であることから、ギャンブル経験が少なく、ギャンブル障害傾向得点が全体的に低かった結果が課題として挙げられた。今後は、どの年代に対応できるギャンブル障害傾向の指標があれば、ギャンブル障害の研究の発展につながるだろう。

引用文献

Kahneman, D., & Tversky, A. (1979). Prospect theory; an analysis of decision under risk. *Econometric* 47, 263-291